

**生徒の興味・関心・学ぶ意欲をひきだす授業の構築**  
**自らの学びや生活との関わりを大切にした国語の学習**

**・ 主題設定の理由**

新しい学力観に基づく学習指導要領による教育課程の編成・実施が進められ、高等学校でも平成 15 年度より新学習指導要領が段階的に導入された。自ら学び自ら考える力などの[生きる力]の育成を基本的なねらいとし、学校での学びがその後の学び、さらには生き方へとつながるような教育実践が求められている。

また、激しく変化しつづける社会やそれに伴う価値観の多様化、卒業後の進路環境の多様化や職業観の変化は、生徒たちの学習への意識にも影響を与えている。なぜ、学ばなければならないのかという「学ぶことの意義」が見出しにくくなってきている。このことは学習意欲の低下としても表れる。生徒たち自身が「学ぶ意義」を見出していくことが[生きる力]の核ともいえる主体的な学び、意欲的な学びのために重要であると考えた。生徒たちの興味・関心をとらえ、学ぶ意欲をひきだすために、どのような支援が有効であるかを探りたいと考え、主題を設定した。

「...(今までは)ある面で、知識や技能は、自分の生き方、自分の生活から切り離されたところに存在したともいえる。学ぶことは、自分がどう生きていくか、自分の人間的成長をどう図るかというためにある。学ぶことは、自分から切り離された『よそよそしくてそぞらしいもの』であってはならず、自分の切実な問題を乗り越えるための力でなければならない。」と梶田は指摘する。本来、学習は知的好奇心に満ちた楽しいものであり、生活や生き方と結びついたもののはずである。本研究では学ぶ意欲をひきだす一つの視点として「自らの学びや生活との関わり」に注目し、副主題を設定した。

**・ 研究目的**

本研究は、生徒が自らの学びや生活との関わり

りを大切にした国語科の学習を通して、興味・関心をたかめ、学ぶ意欲をはぐくんでいくための学習の在り方と支援の方法を探るものである。

**・ 研究内容**

**1. 学習における意欲** 資料・文献より

**・ 学習意欲は学力である**

2003 年 10 月の中央教育審議会答申は、21 世紀に求められる力、[生きる力]の知的側面を「確かな学力」とし、基礎・基本としての知識技能、課題発見力、思考力、判断力、表現力、問題解決能力、**学ぶ意欲**、学び方などを含めて示した。このように「**学ぶ意欲**」は「**学力**」そのものの重要な一要素である。また、学習意欲は、学習成立の条件であり、学習の定着、継続に関わる力である。「知的好奇心、学習計画力、学習方法、集中力、持続力などの『学ぶ力』のなかでも根幹を支える力」(市川 2002)であるととらえる。

**・ 心理学的メカニズム**

「**興味・関心**とは特定の対象や領域に対し、選択的、積極的に注目・接近・探索をする傾向をいう。知りたい、わかりたい、できたいという思いや願いがそれに適合するものを環境から選び取るようにしむける。これらとの関わりを通して求める対象や領域についてさらに多くを知り、わかり、よくできるようになる。人が生得的に持つ**好奇心**という学ぶ意欲のメカニズムを、より主体的、能動的に起動する心的はたらきである。」(市川)

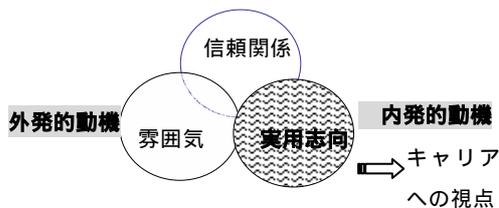
**意欲**とは特定の対象や領域に対する「積極的に、知りたい、わかりたい、できるようになりたいという思い」(市川)である。学習意欲につながる動機づけには次がある。

**外発的動機づけ** 外から与えられる目標をめあてにして学習するときの意欲。(物理的賞罰や賞賛、

叱責など)

**内発的動機づけ** 学ぶことそれ自体の楽しさや意義を求めて学習するときの意欲。(知りたい、できるようになりたいなど)

現在、価値観が多様化し、フリーターやニートが増加、さらに少子化が加速する中で、学校のテストで上位の成績を収めるため、受験に合格して大学に進学するためなどの外発的な動機づけは、次第に希薄化している。内側から湧き上がる内発的で個性的な意欲をひきだすことに一層注目する必要がある。板橋(2002)はさらに、外発的動機づけと内発的動機づけのつながりの過程に注目すべきであるとし、学習環境や学習集団の雰囲気、指導者との信頼関係、**実用志向**を重視すべきだと述べている。研究の視点「キャリアを見つめた学習」に関わる。



「外発的動機と内発的動機をつなぐ」

### ・自己肯定感は学習意欲をたかめる

自己肯定とは自分自身を積極的に認めていることとする前向きな姿勢である。また、自己をとりまく周囲や他者についても認め、肯定的にとらえようとする姿勢である。しかし、現在、さまざまな学習活動の場面において、自己肯定感の弱さを感じる場面がある。生徒が自己肯定感を感じる場を学習の過程で適切に設定することは次の学習への積極的意欲や意欲の形成につながるととらえる。

一般的に自己肯定感は次のような場面において得られる。

自らの学習活動をふりかえり、成果や自己の努力した学習の過程そのもの(本研究では「学びの歴史」と呼ぶ)に達成感や充実感を感じる場合。

他者から賞賛されたり価値が認められたりすることなどを通して実感する場合。

### ・「関心・意欲・態度」の評価

「関心・意欲・態度」は情意的領域とよばれ、内面をとらえようとする評価である。しかし「関心・意欲」は移り変わるものであり、他の領域に比べると明確な評価規準が定めにくい。評価規準を明確化し、学校全体や指導者集団が共有することが重要とされる。

また、情意的領域に適した評価法を目的内容、場面に応じて選択し活用することが有効である。長瀬(2003)によると、**相互評価法**は、学習への意欲、学習の準備、学習への取り組み、学習場面での仲間との関わり方、学習目標の達成等の評価に適し、学習集団づくりに有効である。また**ポートフォリオ法**は学習のプロセスを大切に評価し、友人や指導者、保護者、地域の人々との対話も重視することから自己肯定性をはぐくみ、学ぶ力につなげる評価法であるとされる。

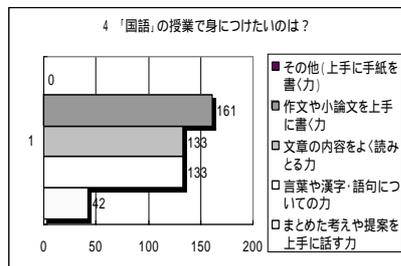
### 2. 学習に対する意識と意欲資料・調査より

2002年NHK放送文化研究所による中学生高校生意識調査では「家庭での学習時間の平均」は中学生高校生ともに減少。学年があがるにつれて、勉強の動機づけが弱まる傾向がある一方「興味があることを勉強したい」という意識は強まるという結果が報告されている。2001年に実施された「石川県学校教育に関する県民意識調査」でも「家庭での学習時間」は、学年があがるにつれ減少。「授業の理解」については、高校生では23%が「あまり理解していない」と回答している。(「石川の学校教育振興ビジョン」より)

このような結果から、学習に対する意識の変化を指摘、学習意欲の低下について危惧する声も聞かれる。しかし、「子どもたちは本来、好奇心に満ちた意欲的な存在である」。(奈須2001) 先の県民意識調査でも77%が「将来の夢(なりたい職業)がある」と回答している。よって、**学習が将来や自己実現につながっていくとより実感できる授業が求められる**ととらえる。

勤務校で年度の当初に実施した「国語についての意識調査」においても、1年生で「好き」が69%、2年生では50%に減少し、「嫌い」が増える。一方「身につけたい国語の力」

の回答には、1年生2年生ともに様々な期待や意欲も感じ取ることができる。「国語嫌い」が進むことのないように、本来、生徒の持つ興味・関心をひきだし、次につながる学びへの意欲を喚起する支援が必要だと感じる。



2年生 国語の授業で身につけたいこと

### 3. [生きる力]をはぐくむ学習 文献より及び考察

#### ・[生きる力]と教科学力

[生きる力]の核となる力は自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力(中央教育審議会答申)である。大阪教育大学の田中(2002)は学力を総合的に相互関連的にとらえることの必要性を述べ、「教科学力」「生きる力」そして「学びの基礎力」という3つの力を、「子どもたちにつけたい豊かで確かな総合学力」としてとらえ、中でも[生きる力]の「自ら学び、自ら考えて主体的に問題を解決する力」は「教科学力」と深く関わる。教科学力のベースとなるものが「関心・意欲・態度」であるとしている。

#### ・キャリアを見つめた学習

**キャリア教育とは「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育」**

(H11年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等学校との接続の改善について」より)

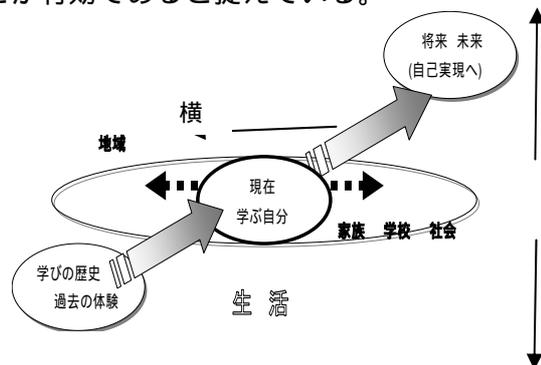
社会の変化や進路環境の多様化は、生徒たち個々の学校生活に対する期待や学習に対する姿勢や意欲にも影響している。高校での学習が、卒業後のキャリアや社会生活に生かされるということを実感しながら学ぶ場を多く設定することが重要であるととらえる。教科の指導の中にキャリアを意識した学習をどのように取り入れていくかを含め、学校全体のプログラムやカリキュラムの充実が求められる。

学習から将来の進路へ、将来の進路から現在の学習へ、という双方向の学習の関連付けによって、生徒自身が「学ぶことの意義づけ」をし、学習に対する意欲をたかめることができる。

#### ・生活や郷土とむすびついた学習

生徒たちはその成長過程において様々な知的能力を身に付けている。小学校、中学校、高等学校での学習、また生活体験や読書体験などを通して得た知性は、一人ひとり個性的なものである。しかし到達度の差や分野に得意不得意などはあっても、学びの過程で子どもたちが感じた「感動」や「充実感」「達成感」は現在も、また生涯にわたっても内から支える力となるものである。生徒たちが身に付けてきた知識やそれを得た学習や生活体験は一人ひとりの「学びの歴史」といえる。授業者がこれを大切にし、学習のリソースを広く生活の中から求めることで、課題を見つけ出し、自らを取り巻く家族、地域、社会などに目をむける契機とさせたい。生活と知性がむすびつき、各教科で得た知識・技能等がさらに生活において生かされ、総合的に働く学び方が望まれる。(知の総合化)

本研究では、歴史としての過去や自らの「学びの歴史」から、現在へ、さらに学びや夢を結実させる将来や未来へという縦の視点に、今生きるフィールドとしての家族、学校、地域、社会へといった横の視点をあわせ持つことが有効であると捉えている。



『石川の学校教育振興ビジョン』においても四つのめざす人間像をもとに、基本目標が設定され、「ふるさとを学ぶ教育の推進」「石川の文化や風土を生かした体験学習の推進」「多文化社会・国際化に対応した教育の充実」

などの施策方針が示された。「生涯を通じての学びの視点」や「生涯にわたって文化に親しみ、文化の担い手としての自負をもって生きる視点」が求められている。国語科の学習を通して「ふるさと」や郷土に親しみ、自らをとりまく社会や文化、そこに生きる(あるいは生きた)人々について関心を持ち、学ぶことは、自身の生き方を考える姿勢にもつながる。学習の素材には次のようなものがある。

- ・教科書教材の郷土や地域に関連した箇所。
- ・郷土や地域出身、関わり深い作家や歌人・俳人などに関わる素材。
- ・郷土や地域に息づく歴史や地理・文化に関わる素材。
- ・地域の人との交流から生まれる素材

(地域の文学者の講義を受ける、地域に伝承する昔話や固有の習慣の聞き取り、学校紹介文やwebページの作成、旧地名や古称しらべ、地域の人との手紙交換、など)

#### ・授業実践と結果

**教材** 国語総合(大修館) 単元 俳諧「おくのほそ道」(全10時間) 1年生40名。

#### 既習事項をもとに発展する学習

- ・中学校での既習事項や既得の知識をふりかえる。
- ・情報や歴史など他教科でつけた力を生かして調べたことをまとめて発表する。

授業はじめの調査では77%の生徒が古典教材は苦手だと回答したが、中学校での学習をふりかえることによって、教材への抵抗感を軽減し、各自が発表等の役割を果たすことで自己肯定感を感じながら意欲的に学習に取り組むことができた。(意欲的に取り組めた92%)しかし知識の量や情報活用能力などに個人差があり、相互に教えあう、評価しあう学びをどう取り入れるかに課題が残った。

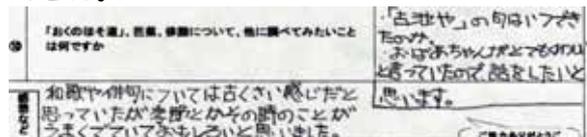
#### 将来のキャリアや社会生活へのつながりを意識した学習

- ・企画する さまざまなツールで調べる まとめる 工夫して発表する(提示する)。
- 資料や文献、インターネット、他教科の先生に聞くなどの方法で調べたことを発表する。企画力、資料や情報を活用する力など[生きる力]につながる力や、話すこと・聞くことを中心に社会的能力(ソーシャルスキル)をたか

めるステップとして意欲的に学ぶことができた。また、それぞれが個性を發揮し、互いに認め合う機会ともなった。しかし評価方法として、発表と発表原稿(観察法・作品法)では十分とはいえず、学習の活動経過を評価する規準を教室内でも共有すべきだった。

#### 郷土や生活との関わりを意識した学習

- ・外部講師(卒業生を含めた大学生)を招いて「旧北国街道と江戸時代の旅」について話をきく。(旅の道具や手形などにも触れる)
- ・副教材「おくのほそ道～北陸路の松尾芭蕉～」とスライド教材(授業者が作成)を利用して北陸路の芭蕉の足跡をたどる。
- ・クラス俳句会。  
郷土や生活と教材のさまざまな関わりを知ることで、学習や教材に親しむ気持ちを持ち、意欲をもって学習することができた。



#### ・結論

生徒の興味・関心をひきだし、自ら学ぼうとする意欲をはぐくむための学習と支援について研究した結果、次が明らかになった。

- 1 生徒が先行体験や既習事項をふりかえり発展させる学習は、自己肯定感をたかめ、学ぶ意欲をはぐくむ。
- 2 生徒が将来のキャリアや自己実現に役立つと感じる学習は、学習に対しての有効感をたかめ、学ぶ意欲をはぐくむ。
- 3 学習と生活や身近な地域・郷土との関わりを学ぶ学習は、自分と自らを支える地域・郷土への視点をはぐくみ、学ぶ意欲をはぐくむ。

#### ・課題

- 1、「関心・意欲・態度」を授業のなかでどう評価していくか、次の授業に生かすための評価方法を確立し、学校、教科において評価規準を共有する。
- 2、勤務校の国語科カリキュラムの中で、どのような教材や場面において、どのような学習活動ができるかを整理し、学年を追っての年間指導計画を作成し、提案する。
- 3、教材と、郷土や地域との関わりや、郷土の文学や歴史について研究し、教材化する。